

2018年5月31日 6月2日 2019年11月4日
2021年12月8日・9日・10日・11日・15日・28日・30日・
2022年1月1日・2日・3日・29日

素朴実証主義のために

嶋尾 稔

教育・研究のための大学のサーバーに政治的な内容を含むファイルを掲載していることの弁明である。森友問題関係の小文は、確かに政治的な性格を帯びていることは否めない。しかし、私が普段従事している研究活動と全く無縁なものではないと考えている。

一言で言うと素朴実証主義の復権の可能性の検討である。資料の性格の吟味を踏まえて、主題に対して最低限何が言えるかを丁寧に虚心坦懐に考えることを第一義と考える方法論の再評価を意識している。要は、あらかじめの解釈図式や問題意識や理論などより、資料の読みを最優先することの大切さの再認識である。はじめに結論ありきの態度の正反対を目指すものである。最初の目論見は大抵裏切られる。それを受け入れることの重要性である。

歴史認識が解釈であると言う点は勿論その通りである。しかし、それが過去の痕跡、あるいはそれを二次的三次的に加工したものの内容や性格に縛られることは忘れてはならないということだ。自由に好き勝手に解釈が出来るわけではない。

歴史の解釈は、大きく二段階に分かれる。まず、過去の痕跡、或いはその加工物の解釈である。これが歴史のコンポーネントになる。さらにいくつかのコンポーネントの間の関係性についての解釈である。素朴実証主義はとりわけ第一の解釈における慎重さを要求するものである。

問題設定時に一つの解釈図式のみを決め打ちで用意することはない。常に複数の見通しを念頭に置きながら資料に向かう。興味のある問題について資料が何を語っているかを虚心坦懐に把握する。自分に都合の良い片言隻句を探し求めることは最も避けなければならないことだ。場合によっては、用意した見通しがどれも当てはまらないこともある。その時は全面撤退か、問題の立て直しである。

すべての先入主を除くことは勿論難しい。客観的な歴史認識には所詮限界があろうが、主観丸出しの自己表現に意味があるとは思えない。出来る限り事実近づこうとするものでなければ公共の知識として評価に値しない。文学としての評価を言う人もいるが、それほど文

学としての素晴らしい歴史を書く事が出来る人はそう多くはないのではないか。歴史学者あるいは社会科学者の文学趣味はしばしば滑稽なものに終わる気がする。

歴史認識を縛るものについて考えが浅いと言われるかもしれない。確かに私は理論や哲学が苦手である。ただ自分なりに次のように考えている。歴史認識を制約するものはいろいろあろうが、大きく四つのレベルを考えられるのではないか。

- 1 自覚されない言語使用や言語表現の制限・規則・管理
- 2 無自覚の、あるいは自覚的な理論負荷性及びイデオロギー
- 3 自覚的な政治思想・党派性・歴史観
- 4 資料の読みの精度、史料批判の意識・力量

第一の制約は、ミッシェル・フーコーとかヘイデン・ホワイトを念頭に置いている。正直、よく理解しているわけではない。ただ、敢えて言ってしまうが、フーコーにしても、ホワイトにしても、西洋精神史の独自の解釈の図式に過ぎないのであろうから、それに操を立てて縛られてしまうのも如何なものかという気がする。これは脱構築とかポスト・コロニアルの議論にも似たようなことを感じる。近代植民地期の力関係の中で作られた解釈図式の自明性を暴くところまでは良いのだが、その後、別の解釈図式（しかもあからさまな党派性）に縛られている気がしてならないのだ。ま、難しい問題なので、与太話はこれくらいにしておく。とりあえず無自覚なことを自覚するよう努力することは良い事だろう。

第二の理論負荷性についても実は私は不案内である。本来科学哲学で無自覚の制約を指したのではないかと思うが、クーン以後、多くの研究者はおそらく自分の乗っかっているパラダイムのものにはある程度自覚的になっているであろう。また、ここでイデオロギーとはある階層や集団に特有の政治解釈の図式のことであり、ヘゲモニー争いで優位にあるものが社会意識に強い影響を与える、その過程で自覚的に政治宣伝する場合もあれば、無自覚にそれを受け入れてしまう場合もあるという構図を考えている（なお、歴史認識の制約という問題ではないが、虚心坦懐な方法で得られた知識が無自覚の政治的効果としてのイデオロギーとして働くという議論も留意しておく必要がある。次の段落で述べることに係る）。

私にもう少しよく理解できるのは、第三、第四の制約の次元である。E.H.カー的問題とランケの問題である。確かに私は昨今の安倍政権批判の風潮に疑問を感じていた。しかし、森友問題について、私は虚心坦懐に資料を読み、資料の記述に即して理解したつもりである。その結果、安倍政権批判に対する批判の主張に行き着いた。これは公平な主張なのか。私は、そのつもりだが、そうではないのかもしれない。一つのテストは、安倍政権批判の立場の人が私の小文を読んでどれだけ納得してくれるかであろう。はてさて、これ如何にである。

さらに多様な学問の制約については、井上章一編『学問をしぼるもの』（思文閣、2017）。

少し話を広げる（非力な私には既に風呂敷は大きすぎるのだが）。批判的な人たちの批判が前世紀的な思考で止まっているのではないかという懸念である。言語論的転回の通俗化というか。我々の精神やら現実やらは言語使用と密接に関わっている以上、言語使用を変えれば現実も変わる。或いはフレーミングの考え方とかも同じである。フレーミングを変えればイメージが変わる。しかし、それは朝三暮四ということだろう。そんなやり口にいつまでも騙されるほどみんな馬鹿なわけでもあるまい。勿論、新たな適切な概念化を否定するわけではない。

即物的、即事的レベルではなく一段上のレベルを操るのが、知識人の役割ということであろうか。以前、大阪都知事の橋下徹氏についてハンズムと名付けてその政治手法を分析する本が出された事がある。そんなことをしても無駄とまでは思わなかったが、有効な批判になっている気はしなかった。政治の論争は、結局具体的な政策論争に尽きるのではないか。

実証主義という用語について

実証主義という術語の主たる用法は、哲学における **positivism** の訳語としてのそれである。**Positivism** は、超越的存在を先験的に考えることを嫌い形而上学的命題は検証不可能で無意味であるとみなし、経験科学と言語分析を重視して、統一的で普遍的な科学の方法と言語を構築しようとして失敗し下火になったものである。吉田夏彦「実証主義」「論理実証主義」『日本大百科全書』（Japan Knowledge Lib.）。Kincaid, Harold.1998.” *Positivism in the social sciences.*” *Routledge Encyclopedia of Philosophy* online.

これに対して日本の歴史学界では理論的研究に対して史実（蓋然的な史実）の解明（史料批判を中核とする）を実証研究と呼ぶことが定着している。ここでの実証主義もこちらの用法に即したものである。

付記

上では分析者として自分が語る場合についての制約について触れたが、勿論、人が語った場合をどう考えるか、すなわち資料解釈の問題についても同様の問題に留意する必要がある。

資料がいかなる制約を受けて出来たものか（資料の成立という出来事）について考えることはそれ自体重要な課題である。ただ、大事なことは、資料が制約を受けたものだからと言

って、その資料に語られている出来事について考察できないわけではないということである。資料の性格を踏まえて現実の蓋然的な有り様を推論することになる*。簡単な場合も有れば、かなり難しい場合もある。結論が出せない場合もあるが、それは仕方がない。安易な結論を回避できるようにすることも専門知識の重要な役割である。

*叙述性の高いテキストの場合は、出来事の解明には不向きなことも多いかもしれない。その場合はもっぱらテキストの依拠する枠組の検討ということになるのだろうが、その際あまりクリアカットな図式化志向に誘惑されないようにした方が良いのではないかと感じる。複合的な制約諸条件の時代性・持続性、局地性・一般性に目が行かなくなることを危惧する。お好みの何かを特権化しないこと。気に入らないものから目を背けないこと、顕著なものとしてないものと中間的なものを冷静に見極めることが大事ではないかと思う。

アンチ解釈学？

西欧近代科学の勃興とともに、立証された経験的科学的知識に基づき世界を法則的に把握しようとする科学的実証主義が台頭した。その進化形態が上に述べた論理実証主義であろう。法則性や理論を断念した素朴実証主義はその頹落あるいは退化形態と言えるかもしれない（ヴィンデルバントは法則定立的に対して個性記述的という名で救いの手を差し伸べてくれたが。一方、20世紀後半に少しく幅を利かせたマルクス主義史学者は非マルクス主義史学者を素朴実証主義者と言って馬鹿にした。）。

他方、科学的実証主義の知識においては分析的実験的方法論が採用され、また、何かについて知識を得る人と何かの間は無関係とされるが、何かを意味連関の全体のなかに置くことと何かとそれを知る人の関与を重視する解釈学という対抗的立場が現れた。そこでは知ることは解釈する（説明ではなく理解する）ことだとされる。その立場では、知る人と対象をつなぐものが「伝統」（言語、文化など）である。それは啓蒙思想が排除した因習ではなく、「暗黙知」的に人の世界認識を規定するものである。過去の意味連関の地平と知る人の意味連関の地平を交錯させながら、自分が何者であるかという自己理解が行われる。解釈とは自己理解である。デカルト的な世界（物質）と精神の分離に対して意識の志向性を重視する現象学とも親和的なのだろうが、不案内の話であり、そこには踏み込まない。

この「伝統」観は、啓蒙思想はもとより、ポスト構造主義者やポストコロニヤリストその他に見られるような、近代における構築的側面を過度に（そして様々な意匠で）強調しておいて、それを潰せば事足りりとする単細胞な考え方も異なる。近代批判のための前近代（歴史）の捏造に警鐘を鳴らすという点では意味はあると思うが、「伝統」を実体化する危険性もある。「暗黙知」として継承される過去は雑多であり、家族類似的に共通項を含みつつ人ごとに異なるであろう。つまり、この「伝統」をパラダイムとして一つのまとまった意味連

関の総体として意識化したときにやはりそこに捏造が生じるように思われる。過去と現在を結ぶ因縁が多元的にあるいは公然とあるいは隠然と、そして流動的力動的に働いているということに意識を向けることは重要であるが。

(科学者は一つの強固なまとまりのあるパラダイムに従って研究するのだろうか。そういう人もいるのかもしれない。しかし、先行する諸知見と諸理論をとりあえず超えることが目標なのではないか。ここで理論とは十分に確かめられた仮説である。十分確かめられてはいるが、完全ではない。新たな知見が裏切るならば、それを見直す用意は十分にあるのではないか。ついでに社会科学の理論についていえば、それは十分確かめられてはいないが、よくできたお話である。とはいえ、参考にならないわけではない)

例えば、過去のテキストを理解することについて。解釈学の中には作者のオリジナルの意図を知ることだ(それを批評者がテキストの与える意義とは区別する)とする立場がある。それに反対する解釈学者もいる。安直に「作者の死」や間テキスト性を叫んだりはしないが、作者のオリジナルな意図を認識することよりも、テキストが同時代の意味連関の全体の中かでどのような位置を占めるかを考える方が重要であるとする。確かにテキストから人の意図を確定することは不可能だ。しかし状況証拠を踏まえてそれを推測することは不可能ではない。むしろ意味連関の全体を想定しておいて、そちらを優先するのは、さかしらな思弁を重視して歴史を軽視することになりはしないか。歴史はあくまで出来事であるし、その出来事を発動する個人を軽視すべきではないと私は考える。A という作者が α というテキストを著述・公刊し、その後Bという作者が同様の内容を大量に含む β という作品を著述・公刊したとする(著作権の問題はここでは問わない)。Bや β のオリジナリティについて語ることはできないだろう。しかし、もし資料があればその意図について推測はできよう。締め切りに追われて悪いこととは知りながら(あるいは無意識のうちに)盗作したのかもしれない。あるいは、Bの周辺では α は流通しておらず、かつそれが有益なアイデアであったとして、Bは α の思想を広める意義を痛感しつつ、かつ自分の功名心も満たそうとしたのかもしれない。あるいは α の内容やスタイルが定型的なものであって、AもBもそれに倣っただけなのかもしれない。文学研究者は作者を隠してあるテキストを読ませて、作者の特定をさせようとしても、しばしばそれは困難であるという(部分的類似や影響関係のみで作品の独自性が否定できないことにも注意が必要であろう)。歴史学者にとってどうでもよい話である。ある人がある作品を発表したという出来事だけが問題なのだ。ある人がオリジナリティのない作品を描くまでに、彼は多くの教師から学習し多くテキストを読み多くの人と話したのだろう。それらの多岐にわたる脈絡の結節点として陳腐な作品がつくられたという出来事が生じた。そこにも歴史がある(出来事を特異点として特権化する気はない。それは無数の因果・因縁のなかにあり、それについての語りも多彩でありうる。ただしそれらは一定範囲を超えない点が重要である。)。そして、それらの出来事が引き起こす大小の波紋の

総体（あるいはその連鎖や相互作用）もまた歴史である（そこにトレンドがあるのならばモデル化して検証するもよし、しかしそうしなければならないわけでもあるまい）。作者を殺す必要もなければ、その意図の探索を不可能・無意味と頭から断じることもない。むしろ多次的・可変的な構造的制約なり意味連関の総体なりの思弁的でっし上げを警戒する方がよっぽど有益であろう。

なお、すべては解釈であると言った場合の相対主義の危険性（どんな解釈も許される）については解釈学者も気にしている。個人が自由に判断するのではなく「伝統」に規定されており、テキストはテキストが置かれている意味連関の総体との関連性のなかで理解されるから、自分勝手な解釈を排除できると考えているようだ。私として素朴実証主義的テストに受かるかどうか重要であり、その人が自分の知的願望（「伝統」の希求も含む）に固執して我田引水の詭弁を長々と弄しているなら、それを採用しないのがよい。

自己理解や知的願望のために歴史を歪めること（民間の歴史意識からハイデgger？まで）、そのためのさまざまな工夫や巧妙（狡猾）な操作を洗練と称して正当化しようとする欺瞞（知識人であれば、政治的に硬直した概念化やインチキなフレーミングあるいはメタ構造の高慢な統制的操作—背景的解釈図式のスローマン的恣意的な仮想と批判、実は空疎な上から目線—、ジャーナリスト？の我田引水・針小棒大・断章取義。あるいは〈人権派〉の大仰な脅し文句*など）、これらを否定することが素朴実証主義の目標であり有用性である*たとえば「いのち」。最近では日本共産党周辺が菅政権のコロナ対策について「いのち」をないがしろにしたと叫んでいた（翻って韓国は素晴らしいということであったようだ）が、韓国で感染が広がり死者が増えると何も言わなくなった。「いのち」が大事でないという気は全くない。それを盾に相手を黙らせようという魂胆がセコイのだ。例えば、スウェーデンなどは早くから高齢者の救命を諦めた。この防疫の方法論を「いのち」の観点からどう評価すべきなのか。問題は簡単ではない。

ナショナリズム、植民地主義、戦争が歴史認識を歪めることは確かだ。しかし、それらへの批判が歴史を歪めることもある。どっちもどっちという道徳的価値評価をしたいわけではない。素朴実証主義という基準を使用して少しでも歴史の歪みを矯正したいだけのことである。

ヴィジョンや理念を否定するわけではない。それは未来に向けられるべきものであって過去を自分のお気に入りに改変するために用いるべきものではない。

それでは過去についての素朴実証主義的な知識の意味は何か。

まずは知的好奇心を満たすことだ。過去と現在の異同を知ることは楽しい（人には楽しいし、楽しくない人にも下記の通り無意味ではない）。

それを通して自分たちの歴史上の位置を知ることができる。過去と現在の距離を計りつつ自分たちが如何なる系統や系譜のなかにあること（そしてないこと）を知ることができる。過去とのつながりを「伝統」として実体化する自己欺瞞を避けつつ、近代の断絶性・構築性という半端な虚偽意識を牽制することで、より正しく歴史のなかの自分を理解できる。

大局的には時間の中で自己を位置づけることだ。それは自己の側に時間を回収することではない。とりあえずビッグ・バン仮説を前提にする。熱力学第二法則にしたがえば、時間は不可逆である（エントロピーの増大である【相互作用するすべての系は一つの閉じた系に含まれ、閉じた物理系の全エントロピーは増大する。系の中にはエントロピーが減少するものもある。】。それは時間の終わりに向かっているらしい。現状の様々な秩序や組織化＝低エントロピーは依然人間の生存を可能にしている【秩序や構造の生成のために廃熱とエントロピーが環境に放出される。】。宇宙の始まりはさらにずっと低エントロピーであったということらしい。ブライアン・グリーンによれば、重力と核力が宇宙を高エントロピーに駆動する際に様々な構造（恒星、惑星、生命）が束の間形成される。／また、時間の可逆性を探求する物理学者や哲学者もいる。タイムトラベルの可能性を考える人は（時制のある時間）を否定するようだ。まだ誰も成功はしていない。）。そこから帰結する歴史の一回性ということはいくら強調しても強調しすぎることはない（マルチバース論や多世界解釈論やサイクリック宇宙論を前提にしても我々はもう一度同じ川に入ることはなさそうな気がする。いや全然わかつては居ないのだが。あるいは、「関係」論を突き詰めたカルロ・ロヴェリの量子重力論では時間は人間の錯覚であり問題となくなるといふ。有限な人生（誕生→死）を生きる人間が世界や宇宙を考えると時間とその不可逆性という枠組みを世界や宇宙に投影しているだけなのだろうか？それだけとは思えないのだが・・・。よしんば時間の流れや歴史が人間の生み出した錯覚であったとしても、その錯覚をさらに自分に都合よく加工して人を支配しようとする企みに対抗する術を持ち続けることは依然必要なのではないか。いやより正確には各自が受入れ可能な加工を判断し選択するための決断の根拠を持つことか。例えば、元号は王が時間を支配することだと嫌う人がいる。しかし、ある元号の制定は未来に向けての行為（歴史的な出来事）だ。それを継承することは、歴史家が事後に時間を区切ることより少しましな気がする。）。まず全体的な通史が大事であるが、それだけでは不十分だ。無限の因果・因縁のなかで痕跡を頼りにディテールを探求することでその一回性を実感することが歴史認識の醍醐味だ。通史の彩としてモデル化によるトレンドの検証がなされても良いし、類似性（断じて同一性ではない）に基づくパターンの析出がなされてもよい。しかし、それは補助的なものだ。通史と出来事の認識のなかで一回限りの歴史を体感し（語り方は一定範囲で無数であるが、それは別の話だ）、そのなかで自分の人生を置くことが素朴実証主義の歴史観である。とりあえず（歴史に作用する諸力の強弱についてさらに考える必要はありそうである）。

文学・宗教・歴史

弾圧や個人的事情や曖昧さやその他の状況のために情報源を明示できない話を文学としてフィクション化して表現することは有意味であると思う。しかし、そこで如何なる情報の加工が行われているかを明確に知ることができないという難点は残る。そこに文学の「真実」があると言われても私は俄には信じる気にはならない。しかし、そこに隠された問題があることを知らしめる大きな意味はある。

それは軍記物の資料価値の問題であれ、残虐行為の文学的語りの信頼性の問題であれ、時代性や習俗の理解のための文学の利用可能性の問題であれ、結局、一般論的に何かと言えるわけではないだろう。ある作品の成立という出来事を諸々の関係性（間テクスト性はその一部分に過ぎない）の中に位置づけることでようやくどの程度使えるかが見えてくるのだろう。

（浄瑠璃の時代物ではわざと時代錯誤な設定を導入して観客の感情移入の助けとするようだ。文学的とはそういうことではないか。）

例えば、仏教の教判や師資相承は宗教の外から見れば、自己弁護・自己正当化のフェイクヒストリーに過ぎない。しかし、それは極めて高度な知的営為の歴史でもある。実は私は近現代の社会科学の理論も似たところがあるように感じる。その歴史から何を学べるのか。自己を歴史の中に位置づけようとする努力が人間の知性の歴史の重要な側面であることを知ることができる。と同時に、その認識は、現代の洗練された知性も過去の失敗を引きずっているのかもしれないという反省を促してくれる。宗教的真理は信仰によって依然保持しうる（聖書の歴史世界は啓蒙の時代にボルテールの反ユダヤ的な『歴史哲学』などによって潰されたが、おそらく信仰は消えなかった）。社会科学的真理もどき（そこそこよくできたお話）を疑似信仰によって保持するのはいただけない。その陥穽に陥らぬこと。私が素朴実証主義を唱えるゆえんである。

言語論的転回

20世紀に入って哲学方面で、存在と観念とか物質とか精神とか、すべて言語によって語られるのだから、言語の用法の分析に集中すべしという発想が有力になり、20世紀の後半になってほかのジャンルにも広がっていった。そうすると、歴史学は、言語の用法の歴史でしかありえなくなるが、それはつまらない。やはり言語的用法の分析を踏まえたうえで、その資料から何が最低限引き出せるかを考えるところに歴史学の妙味があろう。最近では、別の潮流で、テキストマイニング系の研究が諸テキストの網羅的横断的な全文ビッグデータを構築し、そのなかで語彙の出現頻度を精力的に調べている（出現のコンテキストも考慮に入れているのだと思う）。無意味とは思わないが、これ、面白いですか？